

フリーペーパー

つな 繋ぎ人



社会福祉士のロゴマーク(左)は、英語表記であるCertified Social WorkerのCSWを、楕円形にデザインした。色はワインレッド、1996年5月に公表された。会員バッジのデザインにもなり、誇りと自信と責任を表す象徴となっている。

SSW (School Social Worker = スクールソーシャルワーカー) 特集号

発行 公益社団法人 大阪社会福祉士会

〒542-0012 大阪市中央区谷町7丁目4番15号 大阪府社会福祉会館1階

13面 ソーシャルワークの本質を問い直す

岩間伸之先生の基調講演 抜粋 (2016年11月5日 大阪社会福祉士学会 関西大学堺キャンパス)

「ソーシャルワークとは、自己実現に向けた本人の歩みを、社会関係の繋がりの中で支えていく、専門的な取り組みです」

「本人が社会の中で、自分は意味のある存在なんだ、と思えなければ、変化に向けた、苛酷な一歩を踏み出すことはできません」

「すべての生活は変化の渦中にあり、すべての人間が老いていきます…ゴールは常に仮のものであり、次々と変わっていくゴールの設定を、本人と一緒に取り組んでいくことが大切です」
(講演の詳細は13面に掲載しています)



優しいまなざし (2016年11月5日撮影)

岩間先生の想いを繋いでいきます

大阪市立大学大学院教授の岩間伸之先生が3月2日、急逝されました。5日の日曜日、大阪市東住吉区の仏光殿臨南寺会館で葬儀が営まれました。早春の柔らかな陽射しを浴びての出棺。友人や教え子たちの別れを惜しむ涙のなか、「先生、ありがとう…」という女性の声があがりました。日本ソーシャルワーク学会副会長をはじめ、数々の要職に就かれていた岩間先生。日本の福祉界をリードしていかれる、と嘱望されていた中での51歳の旅立ちでした。上記の講演内容について、今年になってからも丁寧に記事のゲラを推敲していただいていた。ご冥福をお祈りするとともに、岩間先生の想いをしっかり繋いでいくことをお誓い申し上げます。

大阪社会福祉士会 会長 直木慎吾

大阪社会福祉士会からのお知らせ

大阪社会福祉士会では、2016年度よりスクールソーシャルワークに関する講座や研修会等の実施をスタートさせました。

今後、大阪社会福祉士会では、さらにニーズの高まりが予想される学校現場でのソーシャルワーク実践が子どもやご家族、学校の先生方にとって、より良いものになるよう研修会等を充実させていきたいと考えております。現時点では案の状態ですが、2017年度は以下の内容で講座を実施する予定です。

対象者：SSW 現任者、教職員、教育委員会の指導主事、SSW 活動に関心のある方

日時：2017年 8月2日(水)、9日(水)、23日(水) いずれも19:00～21:00

- 内容(案)**：Ⅰ学校の中で連携体制をどう構築するか
Ⅱケース会議のファシリテーション技法
Ⅲエコマップ・ジェノグラムを用いた家族理解

参加費：未定



直木慎吾会長

社会福祉士ってどんな人？

(大阪社会福祉士会のウェブサイトから)



社会福祉士は、府民のみなさまが生活するうえで困ったことがあったときに、一番身近な相談相手です。

お話をよくうかがって、困っていることの内容を整理し、解決にむけて必要なサービスなどに「つなぎ」、生活や気持ちを「ささえ」、生きていくための権利を「まもり」ます。

SSWの旗手

今、仕組みをつくる

大阪府立大学教授
スクールソーシャルワーク評価支援研究所 所長

山野則子さん

日本列島に大きな風を吹かし続けている…山野則子さんの活動について、国立教育政策研究所の中野澄・総括研究官は、そんなふうにした。子どもたちの最善の利益を考える、SSW (School Social Worker) の風だ。中野さんは、「問題は、国や自治体、教育や福祉の人々が、その風を受ける帆(事業)をどう広げるのか、船(財政基盤)をどう造るのか。そして、どこに向かうのか」と指摘する。SSWの旗手といわれる山野さんに、「風」にこめた想いを聞いた。

(聞き手 平田篤州)

2017年1月27日。その日の活動も、「風を吹かし続ける」ような意欲的なスケジュールだった。

〈1月27日は始発で名古屋に向かい、SSWと教育委員会指導主事を集めた勉強会です。帰阪し、15時から16時半まで大阪府教育委員会の主管課長会議で「たかつガーデン」(大阪市天王寺区)。その後18時45分から「I-site 難波」(大阪市浪速区)で、大阪府立大学主催の「フライデート公開講座・学校コラボレーション講座」最終回の講師をつとめます。なので、17時15分くらいからI-site 難波で、1時間ぐら取材OKです〉

20日前の1月7日に、上記のようなメールをいただいていた。そして、27日夕に地下鉄御堂筋線大国町駅から歩いて5、6分。大阪府立大学のサテライトキャンパス「I-site 難波」に着いた。

「こんにちはあ」

部屋に入ると、いつものように親しみのある声。たぶん、山野さんは夕食抜きになるのだろう。まさに「風を起こす女」

…そんなことを思いながら、インタビューは始まった。

SSWの常勤化

平田 昨年2月に「繋ぎ人」の取材でお会いした時、国にも新たな動きが出てきたと話されていましたが、この1年間の国の動きはどうでしたか。

山野 私も委員をつとめた中央教育審議会(中教審)は2015年12月に「SSWやSC(スクールカウンセラー)を学校などにおいて必要とされる標準的な職とし、職務内容等を法令上、明確化する」と答申しました。この答申の趣旨を尊重する形で、昨年6月に「ニッポン一億総活躍プラン」が閣議決定され、その中で、SSW、SCの重要性や配置の拡充が明記されました。

平田 学校教育法を改正して、SSWを常勤配置する、ということまではしていない。

山野 そうですね。SSWを全中学校区に配置できるように、SSWを1万人にする目標は掲げていますが、法律で定数を盛り込んで、とはなっていません。私が委員をしている文科省の「教育相談等に関する調査研究協力者会議」では、養護教員のようにSSWを法律にのせる文面まで検討したこともありましたが…。国は、あくまでも各自治体でがんばってください、という立ち位置ですね。

〈文科省はSSWの雇用にかかる人件費などを都道府県に助成するSSW予算を今年度の10億円から、来年度(2017年度)は13億円に増額する予算案をあげている。しかし、SSWを教育現場の常勤職員とすることについては「中、長期的なビジョンとして考える」(文科省初等中等教育局)としている〉



SSWの役割

平田 文科省の調査研究協力者会議は、今年1月、報告書を出しましたね。

山野 はい。正式には「児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～」という報告書です。

平田 報告書では、SSWの役割はどのように示されたのでしょうか。

山野 職務の内容としては、1つが「不登校、いじめ等の未然防止、早期発見及び支援・対応」です。具体的には地方自治体のアセスメントを行い、教育委員会に働きかける…つまり、不登校の児童生徒数やいじめの認知件数、児童虐待の件数などから自治体の特徴、ニーズを把握し、自治体に助言する。そして、学校における児童生徒への支援体制の把握、校内巡回などによる学校の状態やニーズを把握し、アセスメントを行って、学校に働きかけることです。

平田 職務内容の2つ目は。

山野 不登校、いじめなどを学校として認知した場合、あるいはその疑いが生じ

た場合の対応。そして、災害などが発生した時の対応です。

平田 未然防止や早期発見の段階ではなく、事態が推移していた場合ですね。

山野 はい。いじめなどの認知の場合は、児童生徒や保護者等との個別面談、家庭訪問、地域からの聞き取り等をもとにアセスメントを行い、支援計画を立案します。災害発生時などは学校内で連携し、教職員とともにチームの構築を行い、児童生徒の最善の利益のために福祉的な観点から支援策を立案します。

今、自治体では

平田 今、SSWは全国に何人ぐらいいるのでしょうか。

山野 平成27年度で1400人ぐらいです。あくまで国予算で動いている人です。

平田 SSWの常勤化や仕組みづくりについて、自治体レベルでは進んでいるところも出てきているのですか。

山野 横浜市が、来年度から正職でスーパーバイザーを配置する予定です。

平田 この1年間、あらためて自治体の動きをふり返っていただくと。

山野 SSWの数が増えればいい、という問題ではないと思っています。数が増えた、良かったということはひとつにはあるけれど、仕組みをどう作るかが、重要だと思います。その意味で、仕組みをつくってSSWを活用する、という問題意識の広がりを感じています。

仕組みづくり

平田 山野さんが所長をされている大阪府立大学のスクールソーシャルワーク評価支援研究所の主な活動のひとつは、まさに仕組みづくりですね。

山野 研究所の取り組みで、2012年度から進めている「効果的なスクールソーシャルワーク事業プログラムのあり方研究会」の参加者も、広がっています。このプログラムは、実践家と導き出した「1人ひとりの子どものQOL(生活の質)

の向上」と「支え合う地域ができる」という目標に、WEBを使って、マニュアルに沿って、SSWや指導主事としての役割がどれだけ達成されているか、などをチェックできます。

平田 教育委員会の指導主事やSSWのみなさんが活用しているのですね。

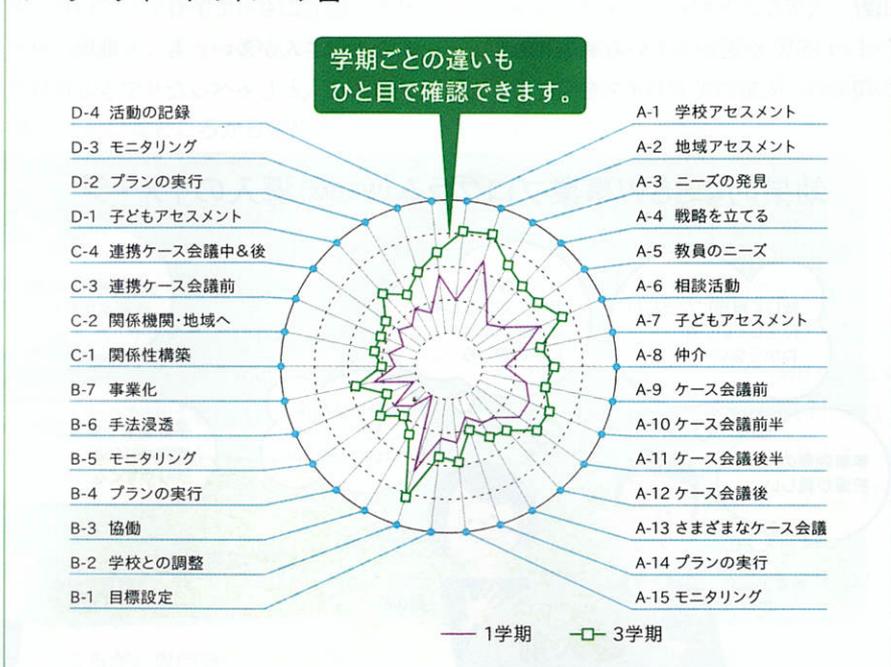
山野 例えばSSWの場合。SSWの実践ポイントを4領域30項目で示して、その1つひとつができていくかどうかチェックし、それがレーダーチャートになったり数値化されて、業務の進捗状況の「視覚化」によって点検、評価できます。山口県や横浜市などは、このマニュアルの導入によって、SSW活用の仕組みが進みました。

〈2017年2月11日、堺市の大阪府立大学なかもずキャンパス。「あり方研究会」が行われ、山口県からマニュアル導入の事例報告があった。「面倒だけど、やる意味あるよ、といわれるまで3年かかった」と、報告者の「やまぐち総合教育支援センター内子どもと親のサポートセンター」のSV(スーパーバイザー)とSSWをしている認定社会福祉士の岩金俊充さん。岩金さんは、マニュアルを県内全域に普及していくうえでのポイン

トを、次のようにあげた)

- 現場尊重、現場主義
- 現場は「理論より実践」「本音はやりたくない」「時間がもったいない」→これが普通だと考えて対応する
- 意見・理念を押しつけない
- 指示・命令・ダメ出しをしない。あくまでもお願い。
- 教育委員会とSSWに、ワンダウン・ポジションをとる
- 指導主事とSSWに負担をかけない
- 雑用はSVがする(日程調整・配布物印刷・欠席者への報告など)
- このマニュアルの完成度や正確性、意義、哲学の議論にのめりこまない→目的は「理論・マニュアルの勉強ではない→マニュアルを用いて障壁分析と目標設定をする
- 実際の話、事例の話もする
- 全員に平等に発言する機会
- 長い話、関係ない話は、思い切ってくる
- 最後に感謝の言葉と「笑い」
- 終了後の報告シートは、該当の教育委員会とSSWに直接送付
- 県内のSSWには、匿名化したシートを送付→他の市町の取り組みを知る

レーダーチャートのイメージ図



山野 今年度は、北海道の石狩市もマニュアルを導入されました。埼玉県や鳥根県も予算をとって仕組みをつくらうとされています。文科省の調査研究協力者会議の報告書にも、プログラムの内容が取り入れられました。このような動きを見える化して、何を見てどう動けばいいか、全くわからない中で、みんなが専門職の価値を維持できればいいなあ、と思っています。

SSWの魅力

平田 若い人たちに、SSWの魅力についてお話しください。

山野 SSWの仕事は、たとえば学校に配置された場合、自分で絵をかけて自分でやればやるほど学校が変わる。組織が変わるといのは、ほかの社会福祉士の仕事では、たぶん難しい。児童相談所の社会福祉士は、組織の中の1パーツなんです。クライアントが変わるといことはあるけど、組織はよっぽどでないと変わらない。SSWだったら、学校組織そのものが変わるので、そこが面白い。学校には子どもたちがいる、元気をもらえる、それも楽しいですね。

平田 逆に、SSWとして直面する大変なことはどんなことですか。

山野 大変なことだらけですけど(笑)。いまのSSWが置かれている職場としての環境は、先輩のアドバイスを受けてたり、

横のつながりで支え合ったりできる、そんな仕組みが不十分です。だから、育ちにくい。児童相談所のワーカーが一番育つ。体制があるから…。たとえば虐待の対応で、1人では動かない。係長とか先輩とかといっしょに動く。だから力がつく。組織の一員として動くので変革の面白さはありませんが…。やはり、育つためには「仕組み」をつくるのが大切なんです。

平田 SSWの仕事にとって、教育委員会の指導主事がキーマンですね。

山野 その通りです。指導主事と協働しないとイケません。SSWのWEBマニュアルで、何ができなかったかを分析すると、指導主事への働き掛けが圧倒的にできていないことがわかります。指導主事は異動が早く、大体2年でかわります。だから、SSWだけでなく、指導主事を対象にしたマニュアルも提供しているのです。

子どもたちは今

平田 子どもの置かれている環境は、いぜん厳しい。

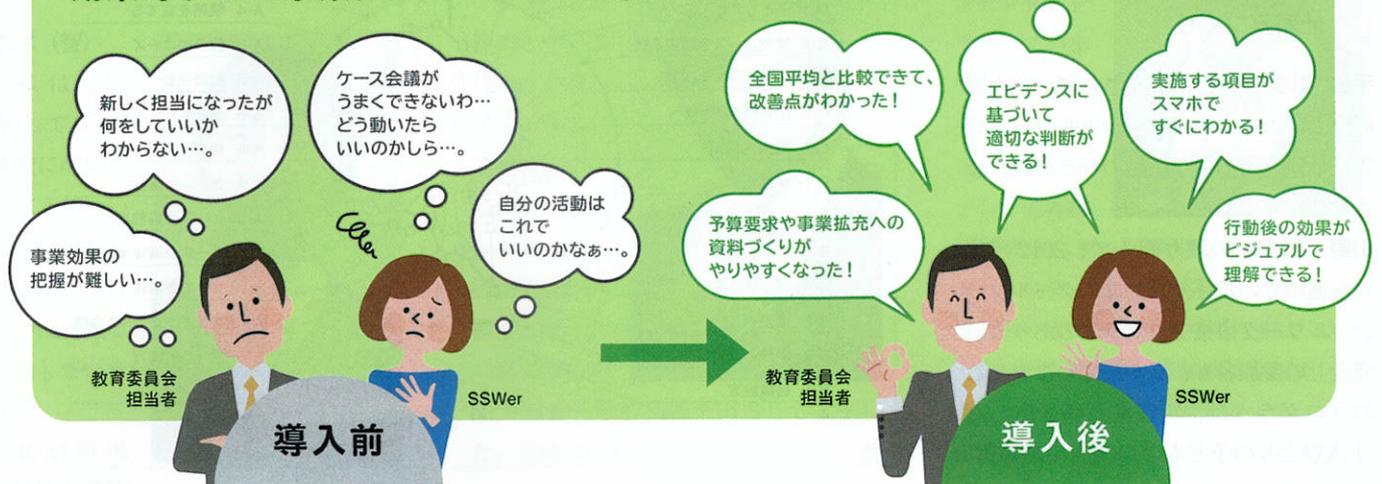
山野 厳しいですよ。子どもに直接というよりも、地域とか環境を変えないと、だめですね。最近では、井戸端会議をみません。閉じこもって子育てしている。そんなお母さんが多い。もっと地域に出て、いろんな人としゃべったりできる地域を



つくらないと。支えあう地域をつくるのがSSWの究極の目標です。仕組みづくりをサポートするマニュアルも、同じ理念でつくったし、それは私が決めたのではなくて、多くの実践家のグループワークで決めてきた、しっかりとしたエビデンスに基づいているのです。

平田 改めて地域の問題点について。
山野 今の社会は、「できない」ということを言えない社会だと思います。それは子どもにも影響するし、子どもも、そうになってしまう。社会人になっても、何も言えずに抱え込んでしまい、鬱になる。早期教育に力を入れて、自己肯定感をあげる。ほめる。繰り返しますが、「できない」ことを、当たり前と言えぬ地域ができていかないと、子どもの環境はよく

効果的なSSW事業プログラム(WEB版)導入のイメージ



ならない。そういう意味で、社会福祉士の役割は大きいです。

学校をプラットフォームに

平田 山野先生は、学校のプラットフォーム化をずっと訴えています。

山野 学校がモールになるみたいなイメージです。ここは学童保育の部屋、ここは子ども食堂、ここは学習支援室…。SSWや福祉の情報もストックされる部屋もある。誰もが簡単に言っていける、簡単に使える。そんな新しいミッション(使命)を持った学校です。

平田 なぜ、拠点(プラットフォーム)が学校なのでしょう。

山野 たとえば、子どもの貧困や孤立の問題を考えてみましょう。児童相談所が緊急対応できるのは、すべての子どもから見ると約1%です。虐待につながる危険性のある孤立状態にある子どもは、すべての子どもの34.8%にのぼります。就学後、こうしたレッドゾーンの子どもの全数把握できるのは、学校しかありません。学校に、全数把握機関としての位置づけが必要なのです。

平田 子どもたちをしっかり見守り、育むことができるモールですね。

山野 子ども食堂も全国にできていますが、本当に必要な子どもが来ていない、という実態があります。孤立している子どもではなく、元気な子が行っている。学校という場に、教員だけでなく教員以外の専門職の人材が入って学校で活動すれば、本当に必要な子どもたちに、支援の手が届きます。

平田 山野先生は、イギリスの教育現場を視察されました。

山野 日本の学校では教員が占める割合が80%を超えますが、イギリスやアメリカでは40%から50%近くが教員以外の人々です。視察したイギリスの小学校では、72人の職員のうち、教員は22人。残りはTA(Teaching Assistant)やメンター(仕事上の助言者)、司書などでした。

平田 学校プラットフォームと視察された小学校は、重なりますか。

山野 イギリスの学校教育について、今は「Extended Services」という言葉が使われています。本来は、「拡大学院」の意味合いです。母親への就労支援などが行われており、ナーサリースクール(保育園、託児室)も校内にあり、学童保育も充実していました。その意味で、学校プラットフォームのモデルのひとつとして、おおいに参考になります。

〈山野さんはインタビュー後の大阪府立大学主催の「フライデート公開講座・学校コラボレーション講座」で、「学校プラットフォーム」についてふれた。その時の資料から、抜粋する〉

- なぜ、学校プラットフォームなのか
 - ・学習支援の拠点や子ども食堂などの一つひとつのサービスが市に一か所や二か所では、すべての家庭や子どもに届かない。30%の必要な子どもに届かない。子どもにとって、自力で行ける場が重要
 - ・30%の層を把握している機関は、就学後には学校しかない。すべての子どもを把握している機関でないと必要な子どもや家庭を発見できないし、発見後、支援のために必要なサービスにつなぐことができない。
 - 学校プラットフォームが機能するための仕組み作りとその制度化
 - ・地域と学校と関係機関の連絡会の策定
 - ・学校内で発見するためのスクリーニング会議(気になる事案の洗い出し=保健所の健診仕組み)、ケース会議の定例化
 - ・教育コーディネーターに内容の価値づけとポストをつくり、誇りをもって担う
 - ・学校、地域、家庭をつなぐ、学校を拠点として動ける人材の役割の明確化とその配置
- これらができる、力量のある地域だけの子どもが救われる現状、その格差は

なくすべき→教員が抱え込まず、福祉を適切に活用するため、教員養成課程に福祉課目を入れる！+福祉、教育、心理を協働で学ぶ学習の導入を！

平田 学校=教員、という認識と実態を変えないと仕組みはできない。支援システム作りを行う専門人材の位置づけが必須なんですね。なぜ、こんなにわかりやすいこと(学校プラットフォーム)が動かないのでしょうか。

山野 そんな声を(みんな)あげてほしいですね。ネックは、先生の仕事が増えると思っていることです。だれが管理するのか。モールの責任者はだれなのか。先生が全部責任を持つわけではありません。教師と福祉の人が、共同で責任を持ちます。むしろ、先生の負担は今よりも減ると考えています。

平田 学校プラットフォームのモデル都市をどこかで作れたらいいですね。

山野 あっちこっちのいい例を集めたらできるんです。「チーム学校」を成功させるためにも、学校のプラットフォーム化は必要です。その核になるのがSSWのみなさんです。正職でない、ひとりぼっちになりがち…などの課題はありますが、今、最も求められている人材です。SSWの職場環境を良くする仕組みづくりへの関心も、確実に広がっています。子どもたちの最善の利益のために、今、すべての人が垣根を越えて繋がって、立ち上がる時です。

プロフィール

山野 則子 やまの のりこ

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類/人間社会システム科学研究科教授。博士(人間福祉)。内閣府子どもの貧困対策に関する検討会構成員/有識者会議委員、文部科学省中教審委員、文科省家庭教育支援の推進方策に関する検討委員会座長などを歴任。大阪府教育委員会SSWスーパーバイザーなどをつとめている。

「SSWと連携した不登校支援」への道

飛躍は衝突から 始まった

阪南市教育委員会生涯学習部 学校教育課指導主事

大辻秀樹さん(44)

2016年12月26日昼。大辻秀樹さんは、大阪市住吉区の大阪府教育センターにいた。大阪府教育センター研究フォーラムの分科会で、阪南市における不登校支援の取組について、大阪府チーフSSW、阪南市SSWをつとめる水流添綾さんと2人で発表した。その後、水流添さんにもインタビュアーとして加わっていただき、大辻さんにSSWとの連携や阪南市の不登校対応について聞いた。

(文・構成 平田篤州 写真 広瀬彰)

□ 2年目で飛躍的に変わった

水流添 指導主事としてSSWを担当されて今年度(2016年度)は2年目。阪南市は、1年目に比べて飛躍的に変わったように思えます。国の不登校対応に関するモデル事業(単年度)をとってSSWを5名に増員された。1年目、私たちは「先生(大辻さん)に伝わってるかな、かみあってるかなあ」というようなことがありました。先生の中では、いかがですか。

大辻 国や府の数値でもそうですが、やはり、阪南市でも平成25年度以降、不登校の児童生徒数は増加傾向にあります。毎月学校現場から送られてくる問題行動調査の動向をみても、不登校対応は喫緊の課題と感じています。近年、特に家庭の養育力や教育力の低下を背景に持つ不登校タイプの増加が目立ってきています。福祉や医療とのつながりも視野に入れ、SSWさんとの連携強化が必要だということは1年目に感じていました。そんな時に、モデル事業の話が来て、上司の後押しもあって、すぐに申請を決めました。



〈阪南市の2015年度のSSWの雇用は、大阪府からチーフSSWとして派遣されている水流添さんと阪南市担当のSSWの中山美和さんの2人で市内の小学校11校と中学校5校を担当し、派遣回数は年間33回が上限だった。2016年度は、国からの100%補助事業である「フリースクール等で学ぶ不登校児童生徒支援モデル事業」を活用することによって、新規事業をスタート。新たにSSW3名を雇用(水流添さんは阪南市SSWとしても雇用)し、計5名のSSWを阪南市で活用することができた。派遣可能回数は2015年度の約6倍の180回あまりとなった)

水流添 先生の中で2年目に入って、阪南市の課題がより明確になったんですね。
大辻 そうですね。不登校は、心理的精神的な不安により「学校に行きたいけど行けない」ケースだけでなく、保護者が仕事に追われて、親子のふれあう時間がとれず、家庭の養育力、教育力が低下していく、そんな今の社会の厳しい就労状況が背景にあるケースも増えてきています。そういう中では、学校だけでは対応しきれない。福祉の視点から家庭のしん

どさに寄り添って支援のあり方を考えてくれるSSWさんが必要だと思いました。
水流添 SSWを活用できる課題が、はっきり見えてきた。

大辻 繋ぎ人たるSSWさんは、どこに、誰がいて、どのような支援をできるのかについて、たくさんの情報を持っています。だから、学校や教育委員会がSSWさんたちと連携することで、福祉や医療などの社会資源との間に入って学校と繋いでいただきたい。また、ケース会議を通じて、先生たちの見立てる力をアップし、家庭や地域など子どもを取り巻く周囲の環境要因にも目を向けながら不登校の改善を図る視点も伝えていただきたいと思ったのです。

水流添 1年目は、どんな感じだったのですか。

大辻 SSWのみなさんを、十分に活用できていなかったと思います。その理由のひとつが派遣回数の問題、これは根本的な問題です。1年目は、回数の制限が厳しかったので、これ以上打つ手がないような状況になってから派遣をお願いする、そんな使い方でしたから、水流添さんや中山さんが困る場面もあったんだろうな、と想像はつきました。SSWさんの表現を借りれば、「もうどうにもならない状況で呼ばれて、逆転満塁ホームランを打ってみると期待される」わけです。もうちょっと早い段階からお願いしていたら、もっとたくさんやれることがあったと思います。お願いするタイミングが上手にできていなかったと思います。阪南市では年間15回という府のSSWの派遣回数からスタートしましたので、学校も教育委員会も、大きな事案への対応に備えて派遣回数をセーブせざるを得なかった経緯があります。だから、予算をとって、(SSWの派遣回数を増やす)新事業を立ち上げることが重要だ、教育委員会の指導主事ですが、行政の人間としても、もっと考えなければと思いました。
平田 SSWさんに頼まないといけな、と2年目で変わったきっかけになった直接的な出来事はあったのですか。

大辻 最初は、私も理解していなかったし、SSWさんも私のことを理解されていなかった(笑)。だから、衝突があったんですよ。

水流添 ありました。ありました(笑)。

大辻 1ヶ月に1回ほどの間隔で、定期的に水流添さんと中山さんと私とで連絡会を開いていたのですが、いつも2対1で責められていました(笑)。でも、お互いに、「もっと私たちを活用してほしい!」「もっと阪南市の子どもたちのために活躍してもらいたい」という一致した思いは持っていましたので、このような衝突の中から、SSW活用の仕組みづくりを構想するようになりました。そして、根本に派遣回数の問題があることはわかっていましたので、100%補助の不登校支援モデル事業には大きな魅力を感じて、よし新規事業をスタートするぞ、となりました。でも、怖かったですよ。ついこの前まで小学5年生の普通の担任ですからね。

□指導主事は行政の仕事もする

プロデューサー

平田 指導主事というと、経験が豊富で校長先生や教頭先生に物申す、みたいなイメージを持っていますが、実際はどんなお仕事なんですか。

大辻 学校を指導する立場ですが、市役所にいる時は、主にはパソコンに向かって事務処理をしていることが多いです。教育現場に出る仕事としては、授業研究の講師として指導助言に行く等です。その他、事業の計画や予算、運営等の行政の仕事もかかわってきます。SSWの事業もそうですが、絵を描いて、事業計画を立てて、予算をとって、人を雇って、事業を軌道に乗せていく…。

平田 事業、ですか。

水流添 予算をとるところからスタートして、回していくのもお仕事…。一事業主みたいなものですよ。

平田 さきほどから行政の仕事という言葉が使われています。私から見ると指導主事というのは、学校の先生というイ

メージを持っていますが、行政の仕事という言葉は、自然に出てくるのですか。

大辻 出ますね。教育現場にいたらまったくやらない、知らない仕事ですし、現場の先生は先生で忙しい。教育委員会に来てはじめて、例えばSCさんやSSWさんを現場で活用できるのは、教育委員会で予算を取って事業を起こした人がいるからだということがわかりました。雇用するお金を確保しないと、そもそもSCさんやSSWさんを派遣することも活用することもできません。ですから、教育現場のニーズを捉えて、資料を集めて、財政課に説明して、予算を取りに行つて…、という行政の仕事が必要になります。

平田 企画、立案して収支を立てて人事を行う…プロデューサーですね。

大辻 もうひとつ、(指導主事は)事業を起こしただけではだめで、もちろん事業をうまく回していかなければなりません。じゃ、あとはSSWさんおまかせね、では有効活用にはつながりません。学校とSSWさんの間に入って、活用の仕組みを考えることも必要です。2年目は4、5、6月、順次、校長会や生徒指導担当者連絡会、SSWに関する研修会などを通じて、SSWさんの活用を呼び掛けてきました。重点派遣する学校には、SSWさんをコーディネートする担当の先生を必ず置いてください、と水流添さんと一緒に行きました。

平田 仕組み作りですね。

大辻 はい。先ほども言いましたが、派遣可能回数の少なさから阪南市ではSSWを使い慣れていない学校が多いのです。SSWを活用する仕組みづくりから考える必要がありました。

〈指導主事は、都道府県や市町村の教育委員会に置かれる専門的職員。地方教育行政の組織及び運営に関する法律に定められている。指導主事の役割について、「上司の命を受け、学校における教育課程、学習指導その他学校教育に関する専門的事項の指導に関する事務に従事する」と規定されている〉

平田 大辻さんの指導主事としてのお仕事全体を100としたら、SSW担当のお仕事の割合は。

大辻 よくぞ聞いてくれました。10分の1ぐらいです。

水流添 えー。そんなお忙しい方だったのに、いろいろ言ってしまうて。聞いていて、申し訳なかった気になってきました。電話やメールもすぐに返せなかったり…。

平田 どんな仕事があるのですか。

大辻 私の主担当は生徒指導なので、いじめ、暴力行為、不登校等に関する業務があります。それから、体育、学校安全、情報教育、教科では国語なども担当しています。SSWに関する業務は生徒指導



大辻さんにインタビューする水流添綾さん

に含まれます。あと、教育相談も担当していますので、いじめや不登校などに関する緊急の対応が入れば、他の業務を止めて対応に当たることもあります。こちらはいつどのくらいの仕事量が入ってくるのかわかりません。

平田 指導主事さんの異動は結構早いと聞いています。せっかくなまくいき始めたのに、担当者が代わってしまっは大変です。

大辻 もちろん、しっかりと引継ぎします。また、事業化すれば、予算があり、人が雇用されているので、いやでも具体的に動いていきます。

□不登校の背景

平田 さて、子どもの貧困、改めて、子どもたちをめぐる不登校などの課題について聞きます。

大辻 確かに、苦しい経済状況を背景とした不登校は増えてきていると思います。具体的な収入についてはわかりませんが、例えば、母子家庭で母親の就労が、午前中はお弁当工場、午後はレジ打ち、夜は飲食店といった、複数の就労（「重」労働）になっている、このような厳しい就労状況を背景にした不登校が増えてきています。また、両親ともに非正規雇用の場合もあります。そのような家庭ではお父さんもお母さんも一生懸命に働いていらっしゃる。でも、忙しさのあまり、家庭教育も、親子のコミュニケーションも貧困になりがちで、子どもに目が行き届きにくくなり、子どもが朝起きられなく（起こしてもらえなく）なったり、生活のリズムが乱れたり遅刻が増え、次第に不登校状態になっていく。

水流添 まさにお金がなくて、経済的に少し厳しい部分をお父さん、お母さんが一生懸命やることで、子どもたちとの繋がりを失っていく…。それが今の問題ですよね。

大辻 水流添さんには、このような不登校ケースに複数関わってもらっています。両親とも働いていて、世帯としての収入はあるんだけどコミュニケーション

が貧困になっている。親はいつもせかせかして、ゆっくりと子どもと会話する時間がない。口を開けば「早く〇〇しなさい」が、出てくる言葉のほとんどになってしまう。子ども自身の弱さもあって不登校になっていく。

平田 スマホやゲームの影響も、(フォーラムの報告では)挙げられていました。
大辻 最近、最も多い不登校加速要因ですね。不登校の子どもたちが家でスマホの動画やゲームに、はまっていく。夜中や朝方までやってしまう。家庭でのルールづくりや生活リズムの立て直しが必要なのですが、家庭にはその力が弱い。そこから変えていかないといけないことは、保護者も先生もわかってはいるのですが、有効な手立てがなかなか見つからない。

〈阪南市の調査によると、阪南市の不登校児童生徒は、2013（平成25）年から増加傾向に転じ、毎年1割程度ずつ増加している。不登校の背景も、従来の①友人関係の問題②学習の問題③心理的不安、から、①保護者の厳しい就労状況②養育力の課題（コミュニケーション不足など）③スマホ、ゲーム依存などが近年、増えている〉

□それにしても2年目で…

平田 今までのお話の中で、水流添さんから補足をお願いします。

水流添 やっぱ1年目はしんどかったんだろうな、と。

大辻 しんどかったですよ。だって、右も左もわからないところからのスタートですから。

水流添 私たち、いじわるしてるみたいに使われてたかも。

大辻 いじわるとはいわないけど。なにくそという気持ちにはなりました。はねかえしていかないと。こちらは1人ですけど。2人で責められました（笑）。

平田 何を責めたんですか。

水流添 責めてないけど（笑）。私たちは、阪南市で何年かやってきて、何をやるべきか見えてきているので、学校や市教委



に上手く活用してもらいたいとただ思っていて。それが上手いかわからないのがもどかしくて。

大辻 私もよくわかっていなかったけど。学校はこうしてくれない、という話をたくさん聞かされて。学校の先生もすごく忙しい。学校にだって言い分はあるのに、私はどちらかというと学校よりの立場なので…。

水流添 そうですよ。学校の先生だったんだもの。

大辻 お互いの言い分をつなげて、いいものにしなればいけない、そういいました。言っていましたよね（笑）。

水流添 私たちもそう言っていました（笑）。

大辻 いったん衝突したのは、よかったですよね。

水流添 そうそう、よかったです。でも、2年目で変わったのは、何があったんだろう、って…。

大辻 心を入れ替えたんですよ（笑）。

平田 衝突したのは最初ですか。

水流添 ずっとぶつかっていました。1年中…。大辻先生のお疲れのご様子は、わかっていたんですが…

大辻 たまにお会いすると、（お2人から）学校が悪い、行政が悪い…私たちは動きたいのに、先生方が…と言われる。

それを、指導主事になりたての私に言うんですかって…(笑)。

平田 (SSWにかかわる仕事は指導主事の仕事のなかの) 10分の1で、ほかのことで忙しいのね。

大辻 はい(笑)。

□子どもたちの目が輝く瞬間

水流添 いま考えると、私たちがSSWを定着させたいと焦りすぎて申し訳なかった、という思いですね(笑)。最初お会いした時から、大辻先生は、子どもたちのことをすごく考えていらっしゃる方だと思っていました。SSWと学校の間にはさまって、大変だったと思います。

〈大辻さんは立命館大学で学び、「教育」を研究しようと、大阪教育大学大学院、さらに関西学院大学大学院へ。「教育」をテーマに研究しているときに、「現場に出て教師として授業をやってみよう。自分の研究のプラスにしたい」との思いから、教員免許を取得、大阪府の教員採用試験を受けて合格。初めて教壇に立ったのは自宅のある岬町の小学校(講師)。2007年、「おっちゃんの新任先生」(大辻さん)だった。2013年には阪南市の小学校に異動。2年前の2015年4月に、阪南市教育委員会に異動した〉

平田 大学時代はどんな研究をされていたのですか。

大辻 教育の研究です。具体的には、「いじめ場面」や「授業場面」の会話分析。

平田 会話分析、ですか。

水流添 ユニークなんです。

大辻 人の会話場面を録音、録画したものを文字に起こして、秩序を見つけていく。その手法を授業場面の研究に生かす…。研究者としての最後の論文は、確か2005年でした。

水流添 論文、読みたいですね。どんな内容ですか。

大辻 TypeMという題の論文です。副題は、子どもが学ぶことに夢中になる経験の構造に関する会話分析からのアプ

ローチ…。子どもたちの目が輝く瞬間を感じられる授業場面の映像データを集めてきて、その場面の教師と生徒の会話を分析しています。

水流添 うわあ、おもしろい。

□チームができた!

平田 この1年とこれからのについて。

水流添 大辻先生のコーディネイトが素晴らしい。2年目は、とてもうまくいっていますよね。

大辻 うまく連携するためには、互いに顔を合わせて協議する場が必要です。SSWさんたちだけでなく、市のSCさんも一緒に情報交流をしたり、合同のケース会議をしたり…。同じ子どもについてSCさんは「箱庭」や「風景構成法」で得られたデータから心理状態を説明し、SSWさんは訪問時の家の様子、子どもの服装、母親の就労状況などのデータから家庭環境を分析し、見えそうな福祉サービスや医療ケアについても説明する。指導主事として端から見ているのが印象的でした。不登校問題の改善を、まさに内からも外からも考える。そして、会の後はみんなで飲みに行きました。教育委員会のメンバーや上司も誘って、さらに親睦を深めました。

水流添 連携会議も多くできて、現場でSCさんと話しやすくなりました。情報交流もさかん。一員というのか、SSWも帰属意識ができて。

大辻 阪南市の教育支援専門家チームができたかな…。

□最後に

平田 最後に不登校をめぐるたくさんある事案を抱えていると思いますが、こんな事案は難しい、といった例があれば、差し支えない範囲でお願いできますか。

大辻 難しいぞ、という事例はいくつもあります。厳しい就労状況や学校への無関心など、保護者の(特にお母さんの)協力を得にくい不登校ケースは対応が難しいですね。逆に、状況が動きやすい不

登校ケースの共通点は、家庭の力を引き出せたところですね。お母さん、お父さんをチームの一員に取り込むことができれば、少しずつかもしれませんが、状況は動き出します。

平田 改めて、SSWさんに期待することを聞かせてください。

大辻 これまでの派遣回数少なから、阪南市ではSSWを使い慣れていない学校があります。仕組みづくりから関わっていただき、阪南スタイルの構築に上手にご協力ください。

水流添 上手に、ですね(笑)。

大辻 そうそう。否定するのではなくてね…(笑)。6月に水流添さんと中山さんに講師をしていただいた市の研修では、学校がやるべきことを明確にしながら、「できるところから、やりやすいところから、始めよう」とご提案いただきました。今ある資源でまだまだできることはある、と具体的な事例を通して話してくださいました。例えば、中学2年生で不登校になった生徒が、実は小学校の時から様々なサインを出していたということはよくあります。対応が早ければ打つ手もたくさんあり、効果も上がりやすい。その子をしてその状態にさせているものは何か?SSWの皆さんには、この環境要因に注視するまなざしとそこから立ち上がる見立ての大切さを先生方に伝えていただき、学校の未然防止力の向上にも一役買ってほしいと願っています。



後方は(左から)
矢野千鶴さん 佐藤あおいさん
宮脇晋介さん

知る ⇒ 変わる ⇒ 動こうや！

子どもが変える・おとなが
変わる・しくみは変わる

2016年12月10日、11日、大阪府吹田市の千里金蘭大学で、「子どもの権利条約フォーラム2016 in 関西」が開かれました。目標（合言葉）は「知る⇒変わる⇒動こうや！子どもが変える・おとなが変わる・しくみは変わる」。大阪での全国大会は20年ぶり。児童福祉法が大きく改正され、子どもの権利条約の理念が初めて条文に盛り込まれたメモリアルイヤーでの開催でした。全国から参加したおとな、ユース（19歳から25歳）、子どもたちは2日間でのべ900人。活発な声が響き、笑顔がはじけました。

（実行委員会事務局長 二葉智代）

フォーラムを主催した実行委員会は、「子どもの権利条約関西ネットワーク」。日本が国連の子どもの権利条約を批准した1994年から20周年となった2014年に「地域版フォーラム」を開いた実行委員会のメンバーに、新たな仲間を迎えて組織しました。

実行委員会の代表は、公益社団法人「子ども情報研究センター」事務局長の山下裕子さん。副代表は、NPO法人「こどもの里」理事長の庄保共子さん、NPO法人「子どもの権利条約総合研究所関西事務所」所長の浜田進士さんがつとめました。

子どもの権利が保障されている関西



司会を担う子どもたち



の実現に向けて活動する30の団体（別表1）と5つの協力団体（別表2）からなり、今回はさらに新聞、テレビ、ラジオなど関西のオールメディアが入った30の後援団体が、応援団として名を連ねました。

フォーラムの開催にあたって実行委員会が立てた目標（合言葉）は

「知る⇒変わる⇒動こうや！子どもが変える・おとなが変わる・しくみは変わる」。「動こうや！」のうねりの先に目指すのは、立ち上げ会で副代表の浜田さんが語った「子どもの声が整理されて仕組みになる」という条例の制定。それゆえ、サブタイトルの起点が「子ども」であることは、大切なこだわりの一つでした。

きいてえや！ほんまはな…

2016年夏から、子ども会議を始めました。6歳から18歳までの40人が登録、権利条約の理念を自身の問題から引き寄せるところからスタートしました。

たとえば、好きな条文にどんぐりで投票し、深めたいテーマを6つに絞り、ワールドカフェ。①子どもは大事にされていますか？②どんな時に傷つきますか？③遊びたいときに遊んでいますか？④18歳はおとな？子ども？⑤子どもが誘拐・売り買いされたらどう思いますか？⑥言いたいことが言えていますか？

そこから見えてきたのは、子どもたちは日常生活の中で、多くの言葉を飲み込んでいくという事実でした。語られない「…」が重要だということでした。「言

いたいけど、言えへんのやん」「黙ってる＝何も考えてないんじゃないで」。

そこで本番は、日ごろ、言葉にできない気持ちを、劇、俳句、ポスター、メガホンで叫ぶなどで伝えることになりました。

その一方で、「おとなは最後まで聞いてくれるか」「あとで怒られないか」という不安がよぎり、「子どもからのお願い」をプログラムブックに書くことになりました。おとなは知っているだろうか。子どもが気持ちを伝えるには、こんなに多くのハードルがあることを。そして、ため息にも、涙にも、反らす瞳にも、ちゃんと意味があることを…。

迎えた12月の本番初日。おとなも足がすくむほどの立派な千里金蘭大学のホールで、子どもたちは、堂々と気持ちを伝えました。その姿はととてもまぶしく、フォーラムを担っている存在感がありました。

子どもとおとなはパートナー

「きいてえや！ほんまはな」のステージに続いて行われた、全国各地（宮城県石巻市、岩手県陸前高田市、長野県、富山県、埼玉県、名古屋市、京都府、大阪府）から集まった若者たちによるリレートークは、一人ひとりの語りが魅力的で、会場から「もっと聴きたかった」という声が多く寄せられました。

トークのテーマは「早くおとなになりたいですか」「10年後の未来、子どもにどんな問題が起きていると思います

か」の二つでした。

議論は客席に広がり、子どもとおとなの境界線の話へ。そんな中、その場で、誰もが確信したのは「子どもとおとなはパートナー」ということだったのではないのでしょうか。子どもが今ここにいるのに「未来を担う人」として大切な議論から外されがちで主体を奪われることがあるという報告もありましたが、子どもは「今」を共に生きるパートナーだと確信したのではないのでしょうか。

「子どもの声 1億人に届けよう！大作戦」

2日目は25の分科会が開かれました。今回の分科会の特徴を一言でいうと、「多彩」に尽きます。それゆえ、分科会担当者がつながれる仕組みがあればよかったという貴重な意見は、目からうろこ。次の開催地につなげたい、と強く思いました。

最後の全体会は、2日間のフォーラムで体験した、子どもの今を「知る」⇒「変わる」というプロセスを1億人（日本中の人）が体験し、子どもが力を発揮できる社会への変革を目指して「動こうや！」と思う人たちを増やすための作戦会議の場として開かれました。

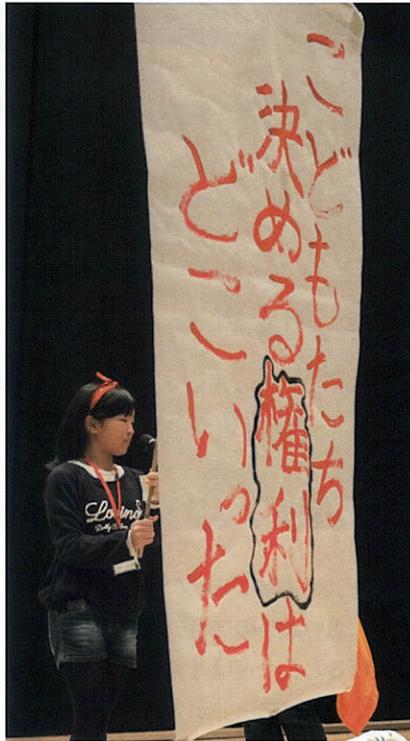
だれに何を届けたい？届けることで2020年にどうなっていたい？。各テーブルで活発な議論が行われ、閉会を告げるころ、会場には40にのぼる大作戦が誕生！これらの作戦は、今後につなぎ、生かしていくことになったのです。

最後に残ったのはネットワーク

実行委員会の立ち上げ会で、私は次のように言っていました。

「フォーラムが終わるとき、私たちは子どもたちからきくと宿題をもらう。そのとき、宿題を一緒に受け止められるネットワークが育ってほしい」

今、それは育ったと感じています。うれしいことに、その中には、子どもたちもいます。フォーラムの数日前、ある子が言いました。



「フォーラムを作るって、子どもとおとなでジグソーパズルのピースをうめていくのになんか似ているね。楽しみだね」この言葉を聞いたとき、私は子どもに「子どもとおとなはパートナー」と言われた気がしました。

この1年、ネットワークの子どもとおとなは、互いの背中を人として見つめ、認め合ってきたと思います。

各分野に専門を持つネットワークのおとなたちで人を大切にする場について議論を重ね、その中で子どもと役割を担ってきました。助けてほしいときは助けて、と互いに声をあげながら…。

フォーラムは終わりました。けれど、子どもたちとは今後も「子ども×おとなでつくる未来」のピースを一緒に埋めるパートナーでありたいと思います。子どもがしっかり参加できる仕組みなしに、子どもにやさしいまちなどありえません。子どものことは子どもに聴きながら。これからも「子どものためにより社会」ではなく、「子どもとともに変える社会」に意味を見出し、「子どものいのちを真ん中に置くまちづくりのバトン」をつなぐ関西ネットワークでありたいと思います。

別表1〈実行委員会 構成団体〉

- ◆ウイメンズカウンセリング京都
- ◆エクパット・ジャパン・関西
- ◆NPO 法人
 - ・アジュール舎
 - ・あそびのお部屋シュッポップ
 - ・えんばわめんと堺 / ES
 - ・KARALIN
 - ・CAP センター・JAPAN
 - ・子育て運動えん
 - ・子どもセンターぬつく
 - ・子どもの権利条約総合研究所 関西事務所
 - ・こどもの里
 - ・SAKAI 子育てトライアングル
 - ・しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西
 - ・チャイルド・ケモ・ハウス
- ◆カウンセリングスペース『リヴ』
- ◆公益社団法人
 - ・子ども情報研究センター
- ◆公益財団法人
 - ・とよなか国際交流協会
- ◆高校問題を考える大阪連絡会
- ◆子・己育ち相談リーフ
- ◆四条畷市人権協会
- ◆全国在日朝鮮人教育研究協議会 大阪
- ◆体罰をみんなで考えるネットワーク
- ◆チャイルドラインひがしおおさか
- ◆特定非営利活動法人
 - ・コリア NGO センター
 - ・フォロ
 - ・フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
- ◆日本アドラー心理学学習グループ
- ◆認定 NPO 法人
 - ・国際子ども権利センター (シーライツ)
- ◆部落解放同盟大阪府連合会
- ◆ろくしきらぼ (6 - Lab.)

別表2〈協力団体〉

- 大阪府教職員組合、大阪市教職員組合
- 大阪ユニセフ協会、兵庫県ユニセフ協会
- 神戸大学学生ボランティア支援室

全体会ルポ

子どもの声 1億人に届けよう！ 大作戦

「子どもの権利条約フォーラム 2016 in 関西」のフィナーレを飾ったのが全体会「子どもの声 1億人に届けよう！大作戦」。2日間にわたり、子どもとおとなの間で活発に交わされた声を全国に届けようというものだ。90分間の大作戦会議をルポした。

(文 今西富幸 写真 実行委員会)

「話すこと聞くことは人をつないでいきます。子どもたちの声をおとなに届ける仕組みを一緒に考えましょう」

全体会は約200人以上が集い、おとな実行委員の長谷有美子さんの熱のこもった呼びかけで始まった。

東京五輪・パラリンピックが開催される2020年までの3年間に、フォーラム参加者の思いを日本中の1億人に送り届けるためには何をすべきか。その具体的なアイデアを提案してもらうのが目的だ。

参加者は子どもとおとながチームを組み、おとな実行委員もファシリテーター（援助者）役として加わって38のグループを編成した。

作戦会議 1

まず「作戦会議1」と題し、自分たちの声をどこにいる子どもとおとなに届けるかを各グループで話し合った。

この結果、10グループと最も多かったのが「学校」、次いで「市町村」が5グループ、「日本全体」「地域ブロック」「町内会」が各4グループと続き、「世界」や「自分の周り」という意見も上がった。

作戦会議 2

続く「作戦会議2」では、どのように声を届けるかの知恵を出し合った。



各グループがテーブルに大きな紙を広げ、思い思いのアイデアをマジックで仕上げると、今度は「見せてえや！いいね！シールツアー」がスタート。

「子どもの権利条約を日めくりカレンダーにする」

「有名人に願ひする」

「生徒会にもっと活躍してほしい」

などユニークな意見が多く出され、参加者は会場の各テーブルを回って自分がいいと思うアイデアに次々とシールを貼り付けていった。

小中学生が司会を担当

全体会では、子ども実行委員のメンバーも司会を担当した。

「子どもとおとなが直接意見交換する場はなかなかなく、とても貴重な体験になりました。話し合うことはすごく大切だと実感し、この作戦をもとにぜひ動いていきたい」

ともに中学3年の伊藤沙英さん（15）と岩本真依さん（15）がマイクを握りこぎ、決意を表明した。

これを受け、子どもの権利条約ネットワークの喜多明人代表が「子どもが動いて社会を変えていく貴重な体験だったと思います。声を上げることが社会を変えていく力になる。今日アイデアを生かした活動をしていってください」とエールを送った。

夢をのせた紙ヒコーキ

最後に2日間の活動を振り返る映像が流れるなか、子ども実行委員で小学6年の浦本蘭さん（12）と小学4年の二葉日葵さん（10）がマイクを握った。

「大阪での開催が決まってから1年間、私たちは会議を積み重ね、より良い子どもからの声を発信できるフォーラムをつくってきました。来年はどこで開かれるか知っていますか」と会場に呼びかけると、来年のフォーラム会場となる長野県から参加した高校3年の竹下大貴さん（17）が「長野の子どもたちも頑張っています。今回のフォーラムでいろんなことを学びました。ぜひ来年は長野に来てください」。

最後に参加者全員でそれぞれの願ひを書いた紙ヒコーキをいっせいに飛ばすと、会場は歓声に包まれた。

あちこちで長野での再会を期す会話が弾む中、フォーラムは幕を閉じた。



ソーシャルワークの本質を問い直す—

「価値」に基づいた実践の構造

大阪市立大学大学院
生活科学研究科教授

岩間 伸之

(2016年11月5日)



●自己実現を支えるソーシャルワーク

なにをもって良しとするのか。生活と人生を支えるソーシャルワークは、そこに答えを出すのが難しいという特性があります。したがって、良心的なワーカーさんほど、これでよかったのかと自問してしまいます。また、専門職としては、成果を示していくということも求められます。

それゆえに、実践の「根拠」が絶えず問われることとなります。もちろん、移りゆく生活課題や社会制度に的確に対応できなければなりません。一方でソーシャルワークとして存立するための「揺るぎなき価値」を明確にしていく必要があります。日々刻々と変化する課題や制度とも向き合いつつ、決して変わることはない「価値」、つまり「援助を方向づける理念・思想・哲学」のことですが、これを意識する必要があるということです。日々の仕事をするうえで、知識や技術が必要になる一方、ソーシャルワークの特性として実践を支える基盤となる「価値」が強く求められます。

●個々の事例に個々に対応できてこそ専門職

それでは、この「価値」とは何か。「支援困難事例」を素材に説明してみたいと思います。困難な事例ほど、ごまかしのきかない本質的な実践が求められ、正攻法の原理・原則に依拠することになります。

拙著『支援困難事例と向き合う』では、地域包括支援センターの管理者の方に、地域で対応に苦慮している、いわゆる「支援困難事例」を提供いただきました。ゴミ屋敷、アルコール依存、ひきこもりといった18の支援困難事例を取録

しています。

一つはっきりしていることがあります。世の中には無数の事例がありますが、2つとして同じ事例はないということです。100事例あれば、100の個別具体的な働きかけが必要となるということです。問題は、その100のアプローチの元をたどっていけば、どこにつながっているのかです。もし、それがどこにもつながっていないか、あるいは100それぞれがバラバラのものにつながっていたとすれば、専門職の営みとは言えません。

今日は、18事例の中から、アルコール依存を取り上げましょう。アルコール依存への対応は大きな困難を伴うことが多く、大変なエネルギーが求められます。ソーシャルワークの実践では、どのように事例をとらえ、どのように働きかけるのか、という2つのプロセスを踏むことが大切です。その答えを求めるとき、何を根拠に置けばいいのか。

この事例では、実践の根拠の一つとして、「本人がありのままの自分を開示し、それをまるごと人に委ねること」を置きました。「委ねる」とは一度すべてを預けることです。援助者には、その覚悟が求められます。そして、援助者に委ねた「ありのまま」を本人が整理しながら取り戻していく作業がそのあとに続くこととなります。本人が歩む課題解決への道程はその先につながっているのです。

●本人のいるところから始めること

援助対象になる本人は、援助者によって課題の解決をされる存在ではありません。ソーシャルワークの援助とは、援助関係の中で本人が自分の課題を解決していくための取り組みでなければなりません。生活上のニーズを充足し、課題を解決する。その主語は本人以外ありえない。本人の人生の中でしか、あるいは本人の生活の場としての地域でしか解決できないのです。ソーシャルワークとは、自己実現に向けた本人の歩みを社会関係のつながりの中で支えていく専門的な営みです。

ところが、専門職という文脈でとらえ

た瞬間に、援助の過程がワーカーの過程に移るリスクを抱え続けてきました。援助の主体を本人自身に置くためには、本人のいるところから始めなければなりません。どのような世界に生き、何を感じながら生活しているのかを本人の内側の世界から理解することが必要です。アルコール依存なら毎日飲みたくないお酒を飲まざるを得ない理由や背景があるかもしれない。まず、そこから始めることが求められるということです。

●最初の一步を支えること

次に自分の足で踏み出そうとする本人の最初の一步をどのように支えるのか。本人が主体的に動き出すためのエネルギーは自分の存在を「価値あるもの」と感じるところからしか出てきません。

社会の中で「自分は意味のある存在だ」と思えなければ、苛酷な次の変化に向けた一步を踏み出すことはできません。自信を失い、自尊心が傷つき、自己評価が低下した人、劣等感、敗北感、無力感を抱えた人に対し、それでも存在することに意味と価値があることを本人自身が認識できるように働きかけることが求められるのです。

援助関係を活用し、本人が決めるプロセスを支えることも重要です。自己決定の原則とは本人が決めるプロセスを支え、最善のゴールを見つける過程を支えることです。さらには、本人の希望や意向を「聞き出す」のではなく、「一緒に見つける」ための協働作業なのです。

そして、最後は新しい出会いと変化を支える。すべての生活は変化の渦中にあり、すべての人間が老いていきます。ADL（日常生活動作）が低下し認知症を発症することにもなる。「住み慣れたこの地域で、今の暮らしを続けたい」と思う人は実際多いのでしょうか。けれども、実際はその暮らしが変わることなく、続いていくことはあり得ないのです。ゴールは常に仮のものであり、次々と変わりゆくゴールの設定を本人と一緒に見定めていくことが大切となります。

子ども・若者の自立支援～どのように支援をつないでいくか

〈パネリスト〉

大阪府教育委員会 SSW 森本 智美

大阪府立高校教諭 森本 光展

NPO 法人 み・らいず 松浦 宏樹

〈コーディネーター〉

大阪人間科学大学助教 山中 徹二

(2016年11月5日)

子どもの貧困が大きな社会問題になっている。子ども期の貧困や虐待経験などを抱えたまま大人になり、社会的排除に至る若者も少なくない。義務教育後の高校生年齢の若者に対して、どのように支援をつないでいくか。3人のパネリストが現場の実践を通して話し合った。

(文 赤坂志乃 写真 広瀬彰)



山中

まずパネリストの方にそれぞれの実践報告をお願いします。

森本 (智)

私はSSWとして9年、高校に配属されて5年。いまは年間24回、1回6時間の配置型で活動しています。

私が担当



している高校は人権担当の教員がSSWの窓口で、私は教育相談委員会に所属して、課題を抱えて就労か進学か迷っている生徒の相談などに対応しています。

高校で関わるケースは、卒業後の進学や就労など多岐に渡ります。生活保護受給家庭の生徒の進学支援など、高校では経済的な問題が表面に出てきやすい。小・中学校では保護者を支援することでケースの改善が見られますが、高校の場合は、卒業後の自立を見据えて生徒自身がどんな力をつけていけるかを考えることが多い。例えば、虐待的な家庭なので家を出た方が良いだろうと寮付きの就職先を探すことも。不登校については欠席日数が卒業に関わるので時間との戦いになる。虐待通告も通告できるのは18歳までなので常に誕生日を確認する必要があります。

SSWとしては高校の支援が最後のチャンス。できるだけ早い段階から関わりたい。

生徒自身が信頼できる教員とつながりを持ち、そこから卒業後も困った時に相談できる支援機関につなげていくことも大切です。生徒が何に困っているのか、いろいろな角度から先生と一緒に支援方策を考え、学校とほかの福祉機関がつながるよう連携のあり方を伝えています。

SSWの活動以外に、子どもの夕刻を支える場所づくりのNPOの代表を務め、地域で途切れずに自立を見守りたいと思っています。

森本 (光)

高校は規模が大きく学校文化も違います。高校が多様化していることをわかっていないとSSWは戸惑うと思う。

私は昭和60年代から教育相談を担当してきました。当時は福祉との連携は全くなく、教



員がカウンセリング・マインドを前提に行っていた。今は、医療、福祉など多様な問題に対応できるよう、教育相談から生徒支援委員会に名称変更して相談にあたっています。

力を入れているのが生徒の居場所づくりです。相談室は出入り自由で、ソファに座ってリラックスしたり相談したりできる。ある発達特性を持つ生徒は、母親からネグレクトや経済的暴力を受けていたので、居住支援と居場所支援で何とか授業に出て卒業にこぎつけました。

相談室に来る生徒は自己肯定感や自己開示性があり、大人への信頼感がありますが、本当に生きづらさを感じている生徒は自己肯定感も自己開示性も低く、大人への不信だらけ。昔なら悩んで相談室に来ていたが、今は悩まないで問題行動を起こすところにSSWの必要性がある。

高校では福祉に関心のある教員は少ない。理解のある校内コーディネーターがいないとSSWは何もできないと思う。福祉の機関の多くは自治体単位で府や市の壁が多く、セーフティーネットが不足している。外部人材として心理だけでなく福祉もわかるSCと、福祉だけでなく心理にも造詣のあるSSWが欲しいというのが切なる願いです。

松浦

NPO法人み・らいずは、堺市より堺市ユースサポートセンターを受託しています。堺市ユースサポートセンターは、子ども・若者総合相談センターと厚労省の地域若者サポートステーションを運営しています。ユースサポートセンターの役割は、0歳～39歳の子ども・若者の総合相談。引きこもりやニート、不登校などあらゆる相談をワンストップで受け止めて支援し



ている。例えば「20歳の息子が引きこもりなので働かせたい」（父子家庭の父親）、「児童養護施設の子どもが高校中退によって施設を出なければならなくなった」（未成年後見人の司法書士）など。相談のあった高校生年齢の多くが不登校で、義務教育後に相談をする機関がないので支援が必要になっています。

平成26年から働きたい若者のサポートを始めましたが、仕事でつまずいてニートになったり、学校を中退して働けなくなる人が多い。そこで高校と連携して中退予防事業として高校内での居場所づくりを進め、堺市で学習と居場所づくり支援事業（通称Litto）を受託しました。Littoは堺市の7つの行政区に相談員を派遣。生活保護の窓口、困難を抱える中高生世帯の家庭訪問や来所での相談のほか、市内に3カ所の居場所を作り、学習支援をしています。

子ども・若者支援の課題は、義務教育以降もセーフティーネットをどう作るか。高校は広域から生徒が来るので学校もそれぞれの地域資源とつながるのが難しい。子ども・若者の施策は教育なのか福祉なのか、縦割り行政を超えた取り組みが必要。堺市では子どものための支援地域協議会を立ち上げて、雇用や教育、福祉と連携しながら問題解決を考えています。

山中

SSWは一人で学校に入りますが、教育現場をどう切り開いてきたのか。

森本（智）

当時の校長がSSWを入れたいと思いを持っていたのはラッキーでした。共通理解を得るにはケース会議が一番大事です。問題を抱える生徒の支援や指導方法について意見が分かれた時は、みんなで見立てを共有しようとケース会議を大規模にしました。先生が何に困っていて、どうアクセスできるかが重要です。

山中

教育相談の森本先生は、学校での位置づけはどうなっていたのですか。

森本（光）

私自身は教育相談係の仕事はつなぎ

役をコンセプトにしてきた。決して一人で抱えて解決するタイプではないんです。近年、高校でも教育相談委員会という委員会制を取る高校が増えていますが、昔はそうではなかったので学校内でさまざまな連携を取るようになりました。外部講師を呼んで福祉の視点を共通理解してもらって練習もする。チーム支援で委員会活動をしています。

山中

SSWが入ることで変化は？

森本（光）

福祉の現場は我々にはわからないので、支援機関の動かし方は一番役に立っている。SSWをどう活用するかにかかっていると思いました。

山中

サポートステーションではどう就労支援をしているのか。

松浦

サポートの対象は学籍のない39歳までの若者。全国160カ所、大阪府下に9カ所あり、場所によってメニューは違うが、個別のカウンセリングや就職のマナー、パソコン講座などをして就職に向けて学習をします。職業の斡旋はできないのでハローワークを活用しながら支援を進めます。就職後はステップアップをフォローし、効用状況の改善も。

山中

発達障害の高校生への対応は？ 貧困や虐待を同時に抱えている子どもは問題が複雑。障害とどう向き合っているか。

森本（智）

私が担当する高校では障がいのある子どもに職業体験のカリキュラムが組まれています。その他の子どもでも虐待通告をして養育手帳の範囲内とわかることがあります。かといって進学から就職ルートに乗せられるかということ、無理や



りすると自尊心を下げる難しい面もある。子どもの気持ちにどう寄り添えるか。

森本（光）

発達障害の場合、小学校から気づいて支援されてきたら高校では問題ない子はいる。大変なのは全く障害に気づかずにきた場合です。しかし発達にでこぼこがあるだけでは障害ではない。でこぼこだけで適応を起こさないうちに支援の手をかけたなら社会で働けます。大学に行くにしてもそういう支援を受けられるところを勧めています。

松浦

ある若者が、「障害自体に偏見はないが、自分がそう診断されることには抵抗がある」と語った。今は就労で頑張ろうとしていますが、そういう人がこれから社会に参加する中でつまずきやすいタイミングで話し合うのが良いと思う。例えば、一般職業適性検査を使って得意不得意を参考にしながら提案します。

山中

良いタイミングでサポートするには、どこかでつながっておかなければいけない。中間的支援を考えながら18歳以降をどう支援していくか。NPOをはじめ福祉法人の社会貢献、地域貢献が求められていると思います。

三田村研吾会長に聞く
社会的使命を
実感できる場



生命保険協会大阪府協会は毎年11月の「生命保険の月」に合わせ、府内の各社の職員に呼びかけて募金活動を実施し、大阪市内の社会福祉施設などに必要な物品を贈っている。

募金活動は、地域社会への感謝の気持ちを伝えようと昭和35年に始まり、今回で57回目。昨年は協会加盟の25社から職員約1万9200人の募金が寄せられた。三田村研吾会長に聞いた。

一募金活動の狙いは

「そもそも生命保険事業自体が社会貢献の意味合いを持っていますが、もちろんそれだけでは十分ではありません。そこで協会に加盟する全職員が会社の垣根を越え、日ごろお世話になっている地域社会に感謝しようと始めたのがこの活動です」

一どのように寄贈するのですか

「寄せられた募金で大阪府内の社会福祉施設が希望する物品を贈呈しています。昭和35年に大阪府社会福祉協議会を通じた寄贈が始まり、多くの児童養護施設や障害者施設の方々に喜んでいただいています。物品類だけでなく、オーストラリアから購入する盲導犬や福祉巡回車も寄贈しており、今年1月には日本ライトハウス盲導犬訓練所で贈呈式が行われました」

一組織にどんな影響を

「職員一人一人が社会的使命を実感する場にもなっています。例えば、生命保険協会が社会貢献の力を発揮したのが阪神大震災や東日本大震災の時の保険業務の対応です。元来、自然災害である地震は免責条項が適用されますが、このときはいずれも協会が契約者の保護を決断し、簡易な手続きによる保険金の給付を行いました。こうした意義を業界全体が共有し、職員一人一人の意識がさらに高まっていくことを期待しています」

※募金の贈呈式が昨年12月、大阪市役所で行われ、三田村会長が、大阪市子ども青少年局の内本美奈子局長（写真）に寄贈目録を手渡した。



つな
繋ぎ人
びと

SSW (School Social Worker) 特集号 フリーペーパー

発行 公益社団法人 大阪社会福祉士会
TEL 06-4304-2772 FAX 06-4304-2773
E-mail ofuku@oacsw.or.jp
印刷 株式会社 日章印刷所 TEL 06-6306-0481
「繋ぎ人」題字 松田 勤 / DTP 穴地奈津子



広がる笑顔…介護福祉士奨学生、社会へ

2017年2月22日昼、大阪市北区梅田のホテルモントレ大阪に、11人の若者たちの笑顔が広がりました。奨学金で学び、今春、介護福祉士として社会に巣立つ学生たちです。支えてきたのは、一般社団法人 生命保険協会大阪府協会（三田村研吾会長）の介護福祉士養成奨学金制度。奨学生との交流会・記念品贈呈式のあと平井泰造事務局長の司会で、11人が抱負を述べました。

大阪健康福祉短大の**美木悠利江**さんは、特別養護老人ホーム（特養）に就職します。「利用者さんが楽しくできるように支援していけたら、と思っています」。

近畿社会福祉専門学校の**井口真理子**さんも特養への就職。「利用者さんの気持ちに寄り添えるような介護福祉士になりたい」。

大阪社会福祉専門学校の**玉置弥菜**さんは、障害者施設へ就職。「コミュニケーションを大切に、一人ひとりに寄り添って信頼関係を築いていきたい」。

南海福祉専門学校の**川崎希**さんも特養へ。「生命保険協会のみなさまのおかげで勉学に励むことができました。先輩方のご指導のもと、精進してまいります」。

関西社会福祉専門学校の**中田光洋**さんも、特養へ。「僕の顔を見たら、安心して笑ってくれるような介護福祉士になりたい」。

大阪医療秘書福祉専門学校の**大石加奈子**さんは、地元（松江市）の特養へ。「介護を仕事としてとらえるのではなく、真心を持って人生にかかわらせていただくという気持ちで実践していきたい」。

大阪城南女子短大の**松下美月**さんは、介護老人保健施設に就職します。「利用者さんに笑顔になってもらうためには、自分がまず楽しまなければと思っています。私は、認知症フロアを担当します。もっと勉強して、利用者さんを理解できるようにになりたい」

四天王寺大学短期大学部の**岡村好夏**さんは、地元の奈良県に就職。「利用者さん一人ひとりのニーズに合った支援を行いながら情報収集を行い、信頼される介護福祉士になりたい」。

大阪国際福祉専門学校の**中尾真二**さんは、特養へ。「人数が多くて難しいですが、一人ひとりと向き合って苦手をつくらず、しっかりかかわっていきたい」。

大阪千代田短大の**向井志保**さんは、病院で働きます。「医療の知識も自分の中に取り込んでいけるように、常に学ぶ姿勢を忘れずに働きたい」。

関西女子短大の**奥田未希**さんは、ユニット型特別養護老人ホームへの就職。「ユニット型の施設なので、個別ケアの実践に励みます。新卒で働くのは私だけなので、新しい風を吹かしていきたい」。